



志道軒五癖論 二

~ 逸 13
1277
2





志道新五癖論卷之二

上開之論

此論果の上章下城云々のありは甚ふに
位にある所なり

帝は位位ハ心もたると九下の道更北口よりけ
中々人事天降神の志事何れもや法孫殿の
漸多むむ下以り子言業子なるよ一ままや一子
むり一孝婦天皇と云へばや一ハかの乃後
子法よこれを行ひ一たまひ朕をてて一能くを
茂況一とま一と種進り云傳一有様あり
ハとて以て一まをて一走りならぬ一事一あり

八百餘のそとていふて、竊心、さき頃、ぶさか、ふい
つゝも、百餘のたをむ、まの情、知る、伊勢、廿六の、筆
此後、とて、一人、の、地、え、あ、なる、子、も、あ、よ、と、見、る
所、い、あ、る、の、た、飛、お、流、し、の、と、た、れ、と、い、ふ、あ、れ、を
子、も、い、け、ま、た、と、記、ま、し、う、ぬ、る、多、う、ん、う、あ、る
物、知、り、に、吐、し、ま、い、伊、勢、源、氏、の、物、流、し、情、し、を
物、う、く、付、く、味、へ、ん、か、別、く、ま、い、ま、あ、る、流、し、を
秘、流、し、た、い、あ、ま、さ、る、の、や、う、ふ、ま、さ、る、那、一、後、ま、何
ま、の、情、も、何、い、免、つ、る、先、を、し、口、授、け、伊、勢、持
後、も、様、こ、う、い、理、く、う、何、里、一、ツ、城、あ、け、て

や、だ、む、う、男、何、い、う、と、記、女、も、あ、り、ま、し、何
ま、も、か、ら、あ、ぬ、子、鶏、の、啼、れ、い、う、を、う、い、と、り
此、た、く、ん、人、知、ま、し、た、あ、ふ、心、ま、し、く、お、ぬ、あ、り、
ま、し、は、顔、形、と、平、女、も、あ、る、ま、い、て、又、若、も、と、う、ぬ
子、鶏、の、啼、た、い、お、を、あ、つ、う、う、あ、見、て、軍、の、情
は、ま、い、情、事、あ、る、い、む、う、し、も、い、ま、か、ら、う、物
て、忍、び、ま、い、お、た、の、む、つ、ま、あ、ら、う、ま、い、別、れ、ま、し、及
ん、下、を、た、う、い、ま、あ、ら、う、い、ま、か、ま、れ、と、身、を、流、る
物、形、と、女、郎、買、の、や、ま、味、唱、酒、也、湯、を、ぬ、り、
ま、あ、い、と、い、ふ、也、や、う、ま、の、味、さ、ま、い、け、り、ふ、お、ま、い、

何れもかゝるをぬきしつとむすの無きと
すは形一思ひまゝのすすめ申しあふと一
きこし名申すも初めそのむかひも不
てすすめあふとすすめしつとむすの
ひすすめとすすめを形一思ひまゝの
とんすすめとすすめをすすめとす
形一思ひまゝのすすめをすすめとす
はあはれはたりすすめをすすめとす
入申すはすすめをすすめとすすめと
はすすめとすすめをすすめとすすめと
上

幸はすすめをすすめとすすめとす
へ二八すすめをすすめとすすめと
は長き場も申すをすすめとすすめと
一折まゝとすすめをすすめとすすめと
すすめとすすめをすすめとすすめと
生のかかり城をすすめとすすめと
玉門はすすめとすすめとすすめと
あすのふとすすめとすすめとすすめと
ら門はつとすすめとすすめとすすめと
おろす人のすすめとすすめとすすめと

つくろふそのにたかやせうまの情一もきてわん
あんのこ大人目も心たれ 女中一は下をぬるじ
声も一鶏うなまやんを あんし何なるもたれと
涙まどもの一をかたつとまら程か一あいの
何をもて物さゆり下うハ鶏のたくらをわと
あれ一ハ下りまの情みんあもかやう敷
たう物つてこらこふ一た情をのけて見物た
物うこまの意味うまこよの鉄炮あやうしくを
まきとて又海民の巻く一丁目ぬう似入をけ
のあろの中一も光君の年月する上をま一女中達

みん雪の雨を一口こつてけけつて白
むらむら地の上

玉門上をよづきみ一たまをくま
くまをむつてまをぬくをぬくをぬく
一あててひちややくの女一のまあり
あをぬよらま声んやや一くまあり
北はまもあまここのあ福くくまあり
かてはぬまあけけあつてあつてあつて
のあをぬら一まぬむらぬまをぬく

あもみのの上

玉門まをくまをぬくをぬくをぬく
あもみの上をぬくをぬくをぬく
くまをかつてあては床のま一たもあ
つまうぬくくまをぬくくまをぬく
あもみや面白くま

あつてむ花

玉門一は床のぬくをぬくをぬく
あつてむ花のぬくをぬくをぬく
あもみや面白くま

あらし

珠のたらのの粒あめつとみろし
くやくと名宛らんや何ともわ
もな桑子いのかのこきまら
一やの藤氏のうもはあぢり
子あへ男位一のふとや
人さふかじあのかをま
いは思

其外と玉うつらのおりも胸を
のちやまとしてやしくも
のち金のたひまら
元因防の侍のそまを
ぬこりし子名をま
且何んぞし初宵は男は
おは思

んの中一ち何うつさ
せんかましく男うつ
上人のあまさん
まーとあまさん
兩人あまさん
梅金殿の
雪子詠
つるま目
子ハれ
お顔も

婦人として、
てのちや、
先ま、
てね、
もあ、
とふ、
よ、
大、
て、
と、

ぬ、
も、
け、
か、
ま、
葉、
糸、
ま、
ら、

今も侍もふ物形るうそめし左方那
少かきまはしおの妙人抱き余のメ合し少は
下し〜無私志なきおのし〜を
うら屋の月義徳法よりうらめし〜を
と身〜ごきなきまらも五人七人の女中
のからして中〜おのし〜を
系操日前の法方松殿をぬむ〜を
おきつ〜引よちらる〜を
へ城でう持〜を
さかた報せ〜を
金次第〜を
院傍〜を

一方方直〜を
代り一度物〜を
如まは然まは三國信来の佛〜を
やう〜を
ゆき〜を
名〜を
おのし〜を
名〜を
の諸摘果報〜を
〜を

若し身はたゞ強とるに外は心飛度蚤まは肌
へをぬき入らまのち相入らざるに耳
子ぬくもすまじく子眼の香の香物あかつ
手はまはれ中を柱りて人も人周の禰あれり
あけの時よまをけ禰る禰る禰る禰る
まもむきひまものまをくまをくまをくまを
らふ此は十七八はまのまをいはるゝ心
たのまをまをまをまをまをまをまを
て新開とつゝまをまをまをまをまを
は女中一まをまをまをまをまを

目六姫 君をぬたりとてまをのまを所
しけのまを怪に身の上とまをまをまを
たぬ故に心をぬくもいんぬやぬ底もた
くはくまをまをのまをまをまを
まをまをぬくまをまをまをまを
まのまをたれのまをまをまをまを
切へまを六男の女まをまをまを
人も増へやから上へは浮世のまをまを
まのまをまをまを板まをまをまを
まをまをまをまをまをまをまを

「あゝあつてこゝろまゝにまゐるの成るはあゝに
おむすゝ心の中のとけりかゝるの心は心ひ供ひ
たる姫君なとのハ婚れお潤ひ新まうくの何ん
たの成るひやるまゝにそゝ〜 その形を漢を新
あつらの者まゝに完上見を外にあらまうくま
あ世界へ玉視有るを男はまゝへの〜り〜初見
ま〜り〜心も〜れ〜心も漢はあまけの〜漢をり
形をる方所の殿様、男ハ〜と〜り〜まゝに那〜
なま〜り〜お乳局あま〜この女中〜の〜り〜まゝに那
ま〜り〜〜内身〜の〜河〜雨力〜の〜まゝ〜と〜心〜ハ 帆

や〜り〜今〜可化るハ外の事〜な〜ま〜が〜あ〜り〜
目〜も〜也〜〜あま〜んか〜な〜う〜い〜や〜と〜ハ〜ま〜ま〜ぬ 知
念のあんな心身はあ〜て〜り〜心〜を〜味〜あ〜ま〜り〜末
ま〜ぬ〜ん〜ん〜あ〜り〜あ〜り〜新〜ま〜う〜く〜の〜お〜を〜あ〜〜
ら〜は〜大〜名〜と〜も〜い〜美〜男〜斗〜や〜と〜も〜 極〜は〜れ〜ま〜ぬ〜ん
た〜ん〜〜心〜お〜う〜い〜や〜又〜つ〜物〜と〜も〜あ〜る〜つ〜ま〜ま〜と〜ま〜を
ら〜ハ〜露〜と〜も〜ゆ〜方〜斗〜や〜の〜姫〜君〜な〜と〜う〜中〜ま〜む〜つ
ま〜〜〜〜法〜子〜と〜法〜子〜の〜お〜ま〜ま〜と〜ま〜ぬ〜る〜ハ〜と〜ん〜と〜理
て〜ハ〜え〜ハ〜お〜事〜と〜も〜見〜う〜〜も〜 ち〜名〜の〜け〜つ〜ま〜
ハ〜り〜〜禮〜ぬ〜つ〜も〜あ〜り〜〜り〜た〜ん〜ま〜と〜ま〜ぬ〜つ〜も〜あ

程面りさる百たぬり ち名のお新屋とてしを
お新様とて又津くまをくまひるし面りさる
多々んり目しりても新まは前とぬとたえ
ふふ牙さるちとお新屋とちねまはまらし
たはちえつと怪し方てもとかくお新屋も揚
あまを別しとちあまの替りとのたあらをけけの屋
はくちまひかつかまひ自従のこも形まひみ
様とてまらつちと行美天とてお新屋の酒
アとけけ 赤の肉は心若きいしつちとてつち
と面りさるかてつちりんち本子まらしとあ

さまよりしとて新様とてはさ次第新屋もはまらち
ちむゆくむちけしとて新様とてはまらち
ち骨つちとてちまらち中一はちとてひい
あまの若きぬはよかまらちつちとてひい
い何種は心もちとてちまらちつちとてひい
ち新んち高つちひつちひも田かひ女は産ねを
ちちしと極ち花を祓ちまらちつちとてひい
んの赤はけちちち新子ていあまのちまらち
ちりは理ちちちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちちちちちちち

在るに都座のうへに過生の多しのふふ此し
 一舟一だんとまゝ心やと見ゆつてや大那
 あれとあるあふの殿様は生をまゝつてを舟乗り
 うるに後座のいまはたふとかく子白ゆり
 ぬつては舟一たふり物ものこまを以て舟をこま
 かまきつてゆりま村まゝの法類をまき
 老ふてををえ入る位也一舟一のこまの舟とぬ
 ち先只〜法殿様かまゝつてを舟乗り
 とうまゝもまゝの一舟一法好まると見ゆつて舟
 乗つてぬかあをむつて〜舟中〜のふあつてお

しふはくをいふ心のまゝも 那うかやうも
 正しく抱らまゝつて〜とかくは心は所は二月
 こぢなまゝ〜こまをゆると老ふ〜どのあやか
 けもあんなまゝまゝのりまゝ舟乗るも〜はくさ
 こみらぬ〜局と舟〜やぬ〜先ふ舟舟
 一たう〜舟舟所〜たう〜只〜心〜
 舟一〜つ〜舟〜舟舟一〜舟舟ありは
 けりやまゝぬと白紙と舟〜舟上ち〜つ
 舟の舟舟一漕漕とふ小舟舟舟舟舟舟舟
 舟の舟舟〜舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

奥も形くひやまの瀧瀬もあなをまじふは
 ちやいそ其の相れそとよりあまの法庭の水
 とす初なる元とら飛来あまの法庭の水
 へう形くひ飛出さ何れも目やまをたふ
 まの瀧瀬扇をまわしてまあるまひらひと
 ち編きよわつひは折ちて紙をまよつてこの
 ろろ私持候仕なまのまのたふれと殿の
 秋見やりたひの笑をぬくむてま祥のまの
 夢を心く局をえ先まのまのまの殿様の法
 け人まちふりまをまひりまのまのまのま

里より入るまのまのまの殿のまのまの外
 飛来あまの法庭の水とす初なる元とら
 へう形くひ飛出さ何れも目やまをたふ
 まの瀧瀬扇をまわしてまあるまひらひと
 ち編きよわつひは折ちて紙をまよつてこの
 ろろ私持候仕なまのまのたふれと殿の
 秋見やりたひの笑をぬくむてま祥のまの
 夢を心く局をえ先まのまのまの殿様の法
 け人まちふりまをまひりまのまのまのま

ゆゑと云ふ息の詞 身もいふは方止所を
さすはゆつと也 是れいふ也 一 後顔つ
ひきかアサ 一 さつ 一 なるあよるを 殿
と云ふ女も身いふ なるふの初なるはさ雨りく
布あよる 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
さす山前か 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
去れもあまふ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
と云ふり 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
さす阿志 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
さす殿も 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

さす女をいふと抱 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
さすさす 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
さす物もいふ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
と云ふいふ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
と云ふはの礼義 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
又殿の感心 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
さす根さ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
有うさ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
さすさ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
さす 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

局を初何もあらずはそ入むるなりは様子を見
野まはるまは 殿さ母屋のおり美りのわたくし
流しに水維まきたるの女中も志ま成那は
席へもくも男をいしりあつては身もごか
まけあつては憤りもまき心もあつた女中
に物もききりしりあつては涙のまきりおぬも
故石佛抱り水維あつてはあつて水采りあつ
やく心もあつてはあつてはあつてはあつて
まぬ男もあつてはあつてはあつてはあつて
そあつてはあつてはあつてはあつてはあつて

多量の殿様のごときは類格してはあつてはあつて
赤目利りごあつてはあつてはあつてはあつて
川流しあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
よりくはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
一やとあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
ひかまぬもはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
たる尻もはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
感下もあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
中りもあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
志道新五郎論巻之二終



